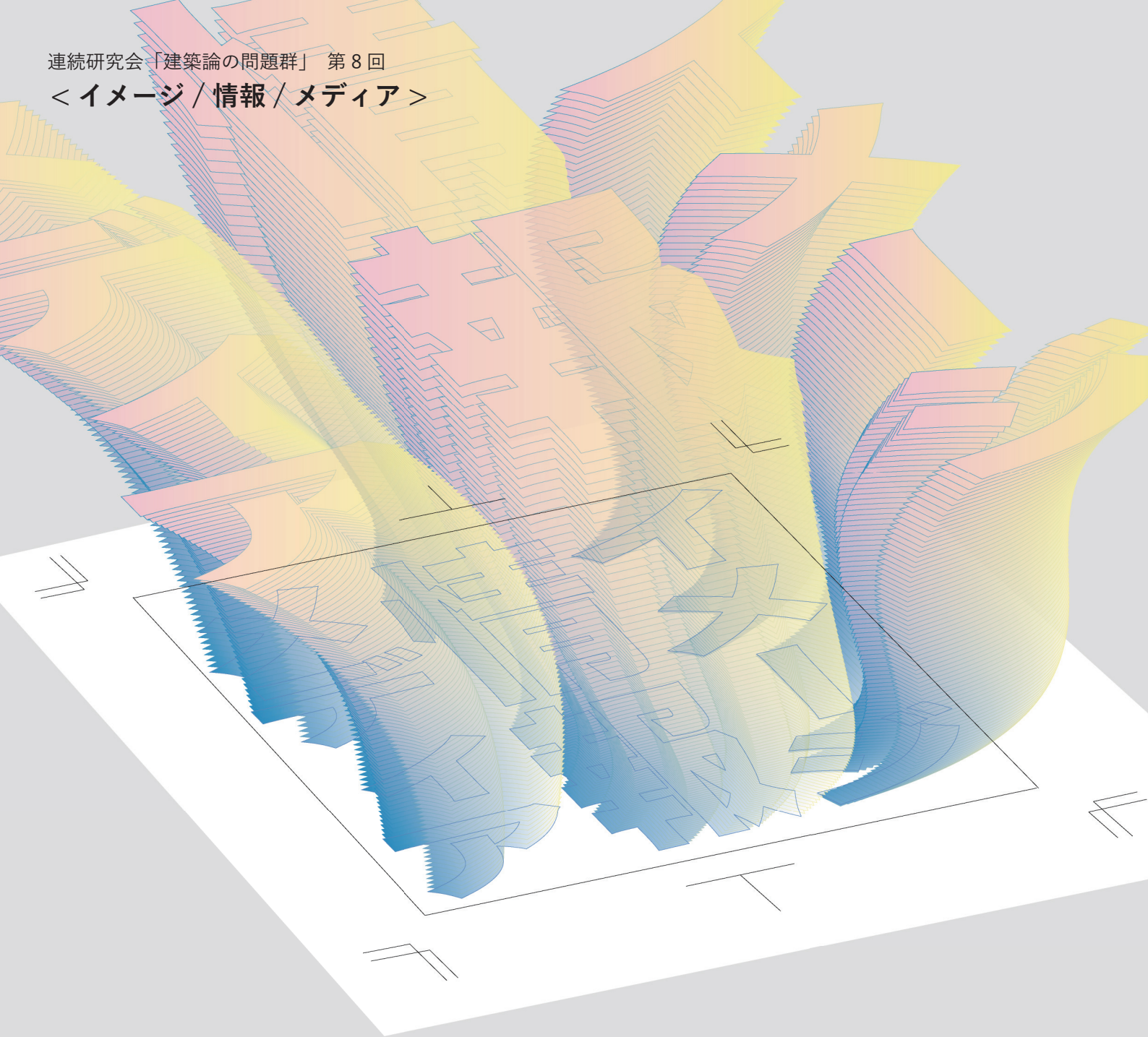
連続研究会「建築論の問題群」 第８回

＜イメージ／情報／メディア＞



パネリスト

建築家/東京理科大学教授	東京工業大学教授/アトリエワン/小さな地球理事	金沢21世紀美術館レジストラー	東京工業大学助教
岩岡竜夫	塚本由晴	本橋仁	香月歩

日時

2023年5月27日（土） 14:30~18:00（開場 14:00）

定員：200名（申込先着順）

参加費：一般 1500円/会員 1000円/学生 500円

東京工業大学 緑が丘6号館 緑が丘ホール　〒152-8550 東京都目黒区大岡山2丁目12−1

※Peatixアプリもしくはご予約の受付画面をプリントアウトしたものを受付にてご提示ください

主催：日本建築学会　建築論・建築意匠小委員会

協力：東京工業大学 奥山信一研究室

問合せ：東京工業大学 奥山信一研究室（担当：香月）

tel：03-5734-3488　Email：katsuki.a.aa@titech.ac.jp

申込みURL:

https://mondaigun-8.peatix.com

趣旨

建築は特定の敷地に１つしか建たない、いわば唯一無二の存在である。そのため建築を経験しようとすれば現地に足を運ぶほかなく、写真やメモを介して知るのはあくまで「複製」（ベンヤミン）としての姿である。一方で、図面や模型、写真によってかたどられた建築のイメージは、それ自体が建築的経験を呼び起こす光源でもあるだろう。人はまだ見ぬ建築、あるいはすでに失われた建築について、断片的な情報をもとに言葉を紡いできたのである。現代では、これから建つはずの建築のかたちまでもが情報（information）によりモデル化される事態に至っている。しかし過去においても、図面は建つべき建築の姿を示すメディアであった。

少なくとも近代の建築は、いわば情報の総体として表現され、写し取られ、印刷され、世界中に流通し、翻訳され、議論されてきたという点で、メディアとともに存在してきたと言える。21 世紀になり、雑誌や書籍といった伝統的な言説空間はウェブ上に溶け出し、あるいは分解と再構築を繰り返し、展覧会や博覧会のような三次元のメディア空間に編み直されている。本研究会で扱う〈イメージ／情報／メディア〉は、物そのものとしての建築以外による建築論の可能性を探るものでもある。

プログラム

○挨拶
14:30〜14:35
田路 貴浩（京都大学教授）

○趣旨説明
14:35〜14:40
山崎泰寛（京都工芸繊維大学教授）

○講演 1
岩岡竜夫
14:40〜15:10
「建築意匠における類推的機能（イメージ）と図像学研究（イコノロジー）について」

建築における図像学研究とは、建築の主に外観に現れる形式の中に潜む作者の意図や社会的意味を解明する、古くて新しい学である。モダニズム建築が相対化され、いわゆるポストモダニズムの建築思想が登場して以降、多様な表現を纏った建築が見受けられるようになった。それは時代を象徴する記念碑的な建築に留まらず、戸建住宅という日常的な建物の外観にも投影された。そうした多種多様な外観は、一種の記号（＝図像）として社会に存在しているといえるが、それは記号の生産者である作家自身による表現の枠を超えて、その時代の人々に無意識に共有された枠組みを解き明かすための素材であるといえる。

○講演 2
本橋仁
15:10〜15:40
「メディウムとして解放される建築」

建築という概念は、建物を建てるという概念にとどまらず、誰もに開放されたメディウムの一つになることが可能ではないか。関東大震災後におけるバラック装飾社やマヴォの活動、自身の美術館キュレーターとしての経験を通して、メディウムとしての建築の可能性の拡がりを提示する。

○講演 3
香月歩
15:50〜16:20
「メディアに表れる建築・都市」

建築や都市は古来から様々なメディアによって一つの情報として切り取られ、そうしたメディアにあらわれる情報が、私たちの建築や都市を認識するまなざしを形成してきた。現代のメディアに建築や都市がどのようにあらわれ、私たちのまなざしは何が変容し、あるいは変容していないのか、議論してみたい。

○講演 4
塚本由晴
16:20〜16:50
「建築の本、本の建築」

これまで続けてきた建築設計とリサーチを連動させる活動を概観し、日常性の観察から得られた気づきを建築的思考へと展開させるメディアとして本が果たした役割について報告する。

○ディスカッション
17:00〜17:50

○まとめ
17:50〜18:00
奥山信一（東京工業大学教授）